

高畑幸著

『在日フィリピン人社会』

—1980～2020年代の結婚移民と日系人—



評者：竹ノ下 弘久

本書は、著者の30年以上にわたる研究成果をもとに執筆されたものであり、著者のこれまでの研究の集大成とも言える作品である。評者である竹ノ下は、著者の高畑幸氏と、石川義孝氏が研究代表を務められた主に地理学と人口学の観点からの日本における移民定住に関する共同研究に参加することで、直接お話しする機会を持つことができた。共同研究が終わってからは、直接お会いする機会はなくなったが、今回、編集委員会より高畑氏が出版されたご著書の書評のご依頼をいただいた。その後の高畑氏のご研究を十分にフォローできていなかった評者にとって、今回の書評は、高畑氏のご研究から移民研究について新たな着想を得る良い機会と思い、書評の執筆をお引き受けすることとした。

日本では、移民・外国人と日本社会に関して、近年多くの研究成果が刊行されている（是川2019；永吉2021）。評者は、『日本労働研究雑誌』（2025年2・3月号）の「学界展望 労働調査研究の現在」という企画の中で、高畑幸（2024）『在日フィリピン人社会』名古屋大学出版会と、園田薫（2023）『外国人雇用の産業社会学』有斐閣の2冊を取り上げ、両者を対比的

に議論した。園田氏の『外国人雇用の産業社会学』では、日本の大学を卒業し、日本の大企業に就職した海外出身の労働者を対象に、企業側の移民・外国人の活用の論理と、移民・外国人側の現在の職場に対する考えや将来に向けてのキャリアについて、企業側と労働者側双方のインタビュー調査の結果を丹念に記述しながら、明らかにしようとしている。園田氏の著作では、企業特殊的技能の育成や長期雇用慣行といった日本の大企業における雇用慣行と移民労働者との関係を考察している。

園田氏のご研究については、産業・労働社会学の視点が強く反映されているのに対し、高畑氏の『在日フィリピン人社会』は、従来の移民研究、国際社会学、都市・地域社会学の観点から、移民の雇用や労働をはじめとする様々な論点にアプローチしており、両者は異なる特徴を持つ研究である。『外国人雇用の産業社会学』は主に、大企業で働く専門職に注目しているのに対し、本書は移民の出身国をフィリピンに限定して、もっぱら在日フィリピン人の社会統合を論じていることから、研究の視座や問題関心は大きく異なる。『在日フィリピン人社会』は労働や雇用の問題に多くの章を割く一方、地域社会における人間関係や地域との関わり、子どもの教育、1.5世代や第2世代のアイデンティティ、高齢期における家族生活など、扱う論点は非常に多岐にわたっている。今回の書評では、当該書籍の全体像に注目し、本研究の意義とさらなる研究に向けた展望について考察する。

本書は、全部で11章から構成されている。序章では、本書の全体的な問題関心が示されるとともに、本書の重要な理論枠組みや分析の視座について議論が展開される。その後、具体的な実証研究として、第I部では結婚移民について、第II部では日系人についての主に質的調査

によって収集された多くの事例が引用されながら、在日フィリピン人の社会統合の様々な局面について議論がなされている。最後の終章では、「移動と共同性の生存戦略」と題し、在日フィリピン人の社会統合をめぐる諸相を、「生活構造」という視座を用いて、結婚移民と日系人の両者を体系的に比較して理論的な考察を行う。

序章では、研究の目的と対象について述べられ、マクロ統計からうかがえる在日フィリピン人の動向、フィリピンから日本への人の移動が生じた経緯と文脈をフィリピンによる海外への労働者送出政策と日本による出入国管理政策について論じる。その後、本研究の重要な理論概念である社会統合について検討が行われる。本書は、谷富夫（2002）が提唱した「生活構造論的民族関係論」の視座を用いて在日フィリピン人の社会統合を捉えることで、先行研究とは異なる独自の視点を提示しようと試みる。

著者は、都市社会学者である鈴木広の議論にもとづき、生活構造を「生活主体としての個人が文化体系および社会構造に接触する、相対的に持続的なパターン」と定義し、個人と社会構造との関わりや接触が社会集団への参加を通じてなされると考える。具体的には、就業を通じた産業構造との接触や、家族的地位（婚姻状態）を媒介とした親族・地域構造との接合を取り上げている。著者自身も述べるように、こうした考え方は、ゴードンが提唱した同化理論とも大きく関係するものである（Gordon 1964）。

ゴードンの同化理論の特徴は、同化過程を7つの段階・次元に集約してそれぞれの特徴を理論化している点にある。具体的には、文化、構造、結婚、アイデンティティ、態度、行動、市民的である。ゴードンは、文化的同化を同化の第一段階として生じるものと捉える。移住先社会に適応するにつれて、移民は出身国から持ち

込んだ文化や言語から移住先社会での文化や言語へと自身が用いる文化を変化させていくと論じる。第二の段階では、構造的同化が移民に生じる。そこでは、移民は、移住先社会のマジョリティ集団との間に大規模な第一次的な親密な関係を形成し、移住先社会の集団の社会的ネットワークへと参加し、社会の支配的な諸制度へと大きく組み込まれていく。ゴードンは、移民が移住先社会における第一次集団へと参加する構造的同化が、全体的な同化過程を決定する上で重要な役割を果たすと主張する。高畑は、こうしたゴードンによる構造的同化の考え方は、谷富夫（2002）が提唱した生活構造における結合的民族関係や「バイパス結合」という考え方と大きく重なり合うと述べ、生活構造にもとづく民族関係論を本研究の重要な理論的支柱と位置づける。

序章で本研究の理論枠組みを整理した上で、続く第I部では在日フィリピン人の結婚移民をテーマに考察を進めていく。第1章から第3章にかけては、主にフィリピンから日本への国際移動と労働に焦点が当てられる。第1章では、在日フィリピン人女性の労働について、主に興行と介護に注目して論じる。これら2つの分野の就業における労働者の送り出しと受け入れの様相を、フィリピンの海外への労働者送出政策、日本の出入国管理政策、およびフィリピンから日本への移動を仲介する仲介業者に焦点を当てて論じている。第2章では、フィリピン人結婚移民の介護職への参入とその特徴について著者が実施してきた質的調査にもとづき考察する。著者は興味深い知見として、農村や過疎地域では、結婚移民にとって介護が貴重な就業機会を提供していること、興行労働者としての経験や日本での生活経験を介護の仕事に大いに活用していることを報告している。第3章では、在日フィリピン人結婚移民の自営業への参入に

注目して、人的資本、社会関係資本、機会構造という観点から、起業が可能となった3つの事例（レストラン、化粧品販売、英会話教室）を中心に考察を行う。

第4章と第5章では、移民の社会統合とかれらを取りまく生活構造を結婚移民の子どもたちや日本生まれの第2世代に注目して議論する。第4章では、「フィリピン系日本人」をフィリピンにルーツを持つ日本国籍者として定義し、かれらの日本への帰化やアイデンティティについて考察する。続く第5章では、フィリピンで生まれ育ち、10歳前後などの学齢期の途中で日本に呼び寄せられた子どもたちを「在日フィリピン人1.5世代」と定義し、かれらの来日後のライフコースと進路選択について考察する。本章の興味深い知見として、1.5世代の中には、日本での定住や帰化を選択する人たちがいる一方、大学進学を果たした人たちの中には、日本、フィリピン以外の第三国への進学や就職を考えている人たちも一定数見られたことがある。

第6章と第7章では、本書の主題の1つでもある結婚移民の日本の地域社会における関わりや地域の集団活動への参加について検討が行われる。第6章では、全国的に見て数少ない在日フィリピン人の集住地区として、名古屋市中区栄東地区という特定の地域を取り上げる。この地区が繁華街であり、フィリピンパブが密集する地区であることが、先行研究が取り上げてきた他の移民集住地区とは異なる様相を浮かび上がらせていた。その中で、地域の日本人住民とフィリピン人たちがどのような関係を取り結ぶのかを、生活構造における結合的民族関係を鍵概念として考察する。続く第7章では、結婚移民の社会統合について、彼女たちが、日本でどのような集団に、どのようなきっかけで参加し、その中でどのようにして日本社会との関わり

りや接点を増やしてきたか、生活構造論的民族関係論の視座から検討する。

第8章では、著者は今後の日本社会で重要な課題となる結婚移民の高齢化と帰還移住の可能性について考察する。著者がインタビューしたフィリピン人女性は、高齢になり日本で働けなくなった場合、日本では気軽に介護を受けられない可能性や、自分の子どもたちからの介護も期待できないと考え、老後にフィリピンに帰還することを考えている。

第II部では、フィリピン日系人を対象に分析と考察が行われる。第II部の冒頭では、フィリピン日系人とはどのような人々なのか、かれらの概要について紹介される。フィリピン日系人とは、20世紀初頭にフィリピンへ渡った日本人移民の子孫である。フィリピン日系人の日本への移動は、ブラジル日系人よりも遅れて2000年代以降に本格化した。第9章では、静岡県焼津市に居住する日系人を対象とした質的調査にもとづき、フィリピン日系人の移住経路を国際移動を媒介する仲介業者や日本で活動する労働者派遣事業者の役割に注目して明らかにする。第10章では、2008年の経済危機に際して、多くのブラジル日系人が出身国へと帰還したが、その後、ブラジル日系人の帰還により生まれた空席を埋めるような形で、製造業に従事するフィリピン日系人が大きく増加したことが指摘される。9章と10章の興味深い知見として、結婚移民と比較し、日系人は、親族集団での近隣居住が多く、また親族集団は同じ派遣会社で雇用されており、派遣会社が作り出す共同体的空間が、かれらの日常生活に様々な便宜を提供しているため、近隣の日本人と親密な関係を形成する必要がない。このような知見から、フィリピン日系人の生活構造は、南米日系人と類似した状況にあると著者は述べる。第11章では、焼津市に居住するブラジル日系人とフィ

リピン日系人の置かれている状況を、出身国の日系社会、日本での子どもの教育機会と日本語の学習機会、労働市場における両者の競合関係について比較し、考察する。

終章では、これまでの実証分析の知見を振り返るとともに、在日フィリピン人を結婚移民と日系人という2つのグループを生活構造と結合関係という視座から比較し検討する。その中で著者は、結婚移民を「自作の船に次々と家族を乗せながら荒波を渡る船長」と、日系人を「派遣会社が運航する日本製の客船に乗った団体客」と位置づけるなど、非常に象徴的な表現を用いて的確にこれら2つのグループを生活構造論の視座から総括する。

以上、本書の内容を論じてきたように、本書は、生活構造論という特定の理論枠組みにもとづいて、在日フィリピン人の結婚移民と日系人の日本社会における社会統合の全体像を描き出そうとする非常に優れたモノグラフである。生活構造論という観点から民族間の結合的關係を考察しようという理論的視座は、国内外における移民研究の理論枠組みとも非常に親和的な考え方で、説得的であり、本書に理論的な一貫性を与えている。また本書全体を通して、著者自身が述べるように、在日フィリピン人を社会的弱者やドメスティックバイオレンスの被害者としてのみ描くのではなく、周囲の人々との関係や協力を通じて、そうした逆境をどのように乗り越えてきたのか、そうした人々の「強さ」を描き出すことを重視している点も興味深い。

本研究のもつ限界や今後の課題については、著者自身も述べているが、すでに刊行された学術雑誌や書籍に収録された各論文をベースにしていることもあり、各章の内容がそれぞれ独立しているところである。必ずしもすべての章で、本書の冒頭で重要な理論枠組みとされた生活構造論にもとづく民族関係という視座から考

察しているわけではない。評者としては、もう少し各章の理論的な考察を生活構造論にもとづく観点から行うことで、研究全体としての一貫性をより高めることができたように思われた。加えて、結婚移民やその子どもたちの生活構造が、日本一国内にとどまらず、出身国や出身国を越えて第三国へと広がっていく様子も描かれており、社会統合とトランスナショナルリズムとの関係についても、理論的な考察を深める余地を残しているように思われた。加えて本書は、近年の移民研究の理論枠組みと大きく関係はするものの、独自の理論枠組みとして、生活構造論にもとづく民族関係という視座を提唱しており、そうした観点から、既存の移民研究の社会統合論に対して本研究の実証的な知見を通じてどのように貢献しうるのかについても、さらに議論が行われてもよかつたかもしれない。

とはいえ、評者が感じたこのような課題も、今後のこの分野の研究によって追究されるべき課題である。本書は、2025年という本書評執筆時点における在日フィリピン人を対象とした移民の社会統合に関する研究の1つの到達点であり、多くの研究者によって今後も参照されるべき研究であるだろう。

(高畑幸著『在日フィリピン人社会——1980～2020年代の結婚移民と日系人』名古屋大学出版会、2024年5月、vi + 317頁、定価：本体5,800円+税)

(たけのした・ひろひさ 慶應義塾大学法学部教授)

【参考文献】

- Gordon, M. M. (1964) *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, New York: Oxford University Press.
- 是川夕 (2019) 『移民受け入れと社会統合のリアリティ——現代日本における移民の階層的地位と社会的課題』 勁草書房

松本雄一・禿あや美・竹ノ下弘久・山下充（2025）「学界展望 労働調査研究の現在——2022～24年の業績を通じて」『日本労働研究雑誌』776号, 2-51頁
永吉希久子編（2021）『日本の移民統合——全国調査から見る現況と障壁』明石書店

園田薫（2023）『外国人雇用の産業社会学——雇用関係の同床異夢』有斐閣
谷富夫（2002）「民族関係の都市社会学」谷富夫編著『民族関係における結合と分離——社会的メカニズムを解明する』ミネルヴァ書房, 1-60頁